6 黒毛和種種雄牛現場後代検定の成績と活用

ねらいと成果

肉質、肉量ともに優秀な種雄牛を造成するために1998年度から現場後代検定法を実施している。2000年度の検定成績に基づいて育種価を算出したところ北宮波と菊原波が質量兼備の優秀な種雄牛であることが判明し、現在人気種雄牛として活躍している。

内　容

現場後代検定法は、１種雄牛当たり16頭の産子を検定調査牛とし、肥育農家と当センターで各々８頭ずつ28か月齢まで肥育して得られた枝肉成績から種雄牛の産肉能力を判定するものである。2000年度に検定が終了した種雄牛についてその成績（実測値）を表に、またこれらの実測値をもとに推定した育種価を図に示した。

菊原波は淡路島で生産された種雄牛で、枝肉重量の育種価は40.3kgと高く歴代の育種価判明種雄牛と比べてズバ抜けた成績であった。北宮波は当センターで生産した初めての検定済み種雄牛である。この牛は母方祖父をたどると熊波系、城崎系に辿り着き、従来の種雄牛とは異なった血統構成である。両種雄牛とも質量兼備型の種雄牛で、しかも本牛自身の近交係数は各々7.7%、8.0%と比較的低く、現在の但馬牛に求められている枝肉重量の向上と近交係数の上昇を抑制する観点から県下の多くの雌牛に交配し易い種雄牛である。菊伸土井も質量兼備型の種雄牛であるが、遺伝性疾患を保因しているため非保因牛に交配しなければならない。

今後の方針

2000年度までの検定調査牛は出荷月齢が去勢牛で29か月未満、雌牛で32か月未満と規定されていたが、本年度から肥育農家で飼育される検定調査牛に限りその農家の通常の出荷月齢でよいことになった。このことによって晩熟と言われている但馬牛にとっては検定精度が高まり、推定された育種価の信頼性も高まるとともに、検定協力農家の経済性も改善されるものと思われる。

野田　昌伸（北部農技・畜産部）

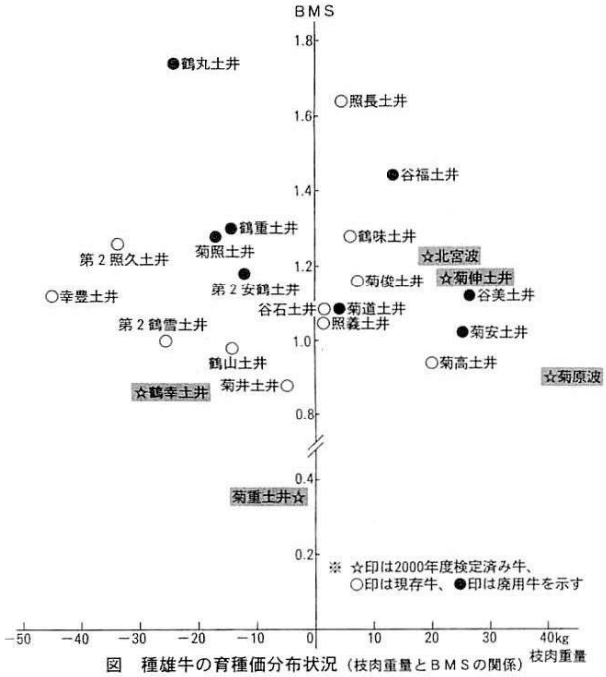

図　種雄牛の育種価分布状況（枝肉重量とＢＭＳの関係）

表　産肉能力検定（現場後代検定法）成績の概要

	検定種雄牛	菊原波	菊伸土井	鶴幸土井		北宮波	菊重土井
血統	父　名	菊安土井	菊安土井	鶴光土井		谷福土井	菊安土井
	母方祖父	安谷土井	安谷土井	菊照土井		茅菊波	安重土井
	調査牛性別	去勢:16頭	去勢:16頭	去勢:12頭	雌:4頭	去勢:15頭	去勢:16頭
体重	開始時	221	222	185	171	226	231
	(kg)	186～283	188～270	160～225	150～204	186～242	151～288
	終了時	641	621	600	505	645	620
	(kg)	555～706	550～714	564～633	487～525	590～710	557～694
	DG	0.66	0.63	0.62	0.45	0.67	0.63
	(kg)	0.50～0.81	0.51～0.74	0.52～0.71	0.43～0.47	0.58～0.76	0.49～0.77
枝肉成績	枝肉重量	381	368	350	294	385	367
	(kg)	293～455	317～437	329～373	271～304	332～428	326～422
	ロース芯面積	51	51	45	41	49	46
	(cm²)	38～61	43～57	36～54	36～48	38～57	35～63
	バラ厚	6.8	6.8	6.9	5.5	6.7	6.7
	(cm)	5.7～8.3	5.4～7.8	5.5～8.2	5.0～6.2	5.8～7.7	5.4～8.0
	皮下脂肪厚	2.1	2.1	2.4	2.5	2.8	2.6
	(cm)	1.3～2.5	1.5～2.8	1.7～3.8	2.1～3.3	2.0～3.6	0.7～4.3
	推定歩留	73.9	74.2	73.3	72.6	72.9	72.9
	(%)	72.1～75.8	72.9～75.8	71.3～74.7	71.3～74.0	71.2～74.4	69.5～76.5
	脂肪交雑	4.4	5.1	4.5	4.5	5.6	2.9
		2～7	3～8	3～7	3～6	3～9	2～6
	枝肉規格	A-4:6頭 A-3:7頭 A-2:3頭	A-5:2頭 A-4:8頭 A-3:3頭 A-2:3頭	A-4:4頭 B-4:1頭 A-3:6頭 A-2:1頭	A-4:1頭 B-4:1頭 A-3:1頭 B-3:1頭	B-5:1頭 A-4:9頭 B-4:1頭 A-3:3頭 A-2:1頭	A-4:1頭 A-3:4頭 A-2:7頭 B-2:4頭

※表中の数字、上段は平均値、下段は範囲を示す